

平成 30 年 5 月 14 日現在

機関番号：14401

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2016～2017

課題番号：16H06921

研究課題名(和文)室鳩巢の漢詩における盛唐詩受容の研究

研究課題名(英文)The Reception of High Tang Poetry in Classical Chinese Poems by Muro Kyuso

研究代表者

山本 嘉孝(Yamamoto, Yoshitaka)

大阪大学・文学研究科・講師

研究者番号：40783626

交付決定額(研究期間全体):(直接経費) 1,500,000円

研究成果の概要(和文):近世中期(18世紀)前半に加賀藩主と徳川将軍に仕えた儒者、室鳩巢(1658～1734)の漢詩において盛唐詩が頻繁に模倣されたことの歴史的背景について、詩語の分析、漢詩制作の経緯・状況、同時代日本における盛唐詩の模倣との比較を通して、具体的に考察した。その結果、鳩巢の漢詩では、特に、理想の君臣関係を表現する際に、好んで盛唐詩に由来する語や趣向が用いられたことが判明し、その背景には、和習の多い林家の漢詩文に対抗すべく、同時代の海外(朝鮮や中国)にも劣らない、和習を排除した漢詩文を作ることと、徳川の治世を古代中国の再来と見做す目的が介在していたと考えられることを指摘した。

研究成果の概要(英文):This research project analyzed the frequent usage of words and phrases borrowed from High Tang poetry in the classical Chinese poems composed by Muro Kyuso (1658-1734), an early modern Japanese Confucian scholar who served the domain lord of Kaga and the Tokugawa shogun in the first half of the 18th century. The goal was to understand why High Tang poetry was imitated so frequently in his poetry. The findings show that Kyuso imitated High Tang poems particularly when expressing ideal visions of lord-vassal relationships. One plausible reason is that Kyuso was competing with the Rinke family of Confucian scholars also in service of the shogun, whose classical Chinese poetry and prose were full of Japanese-style expressions and imagery, and thus composed in an authentically Chinese style that could equal the literary works by foreign (Korean and Chinese) scholars, in order to portray Tokugawa's rule in Japan as a legitimate second coming of the ideal rule by the Sages of ancient China.

研究分野：日本漢文学

キーワード：江戸時代 日本漢詩 室鳩巢 木下順庵 新井白石 祇園南海 盛唐詩 擬古

1. 研究開始当初の背景

中村幸彦氏や日野龍夫氏による研究では、近世中期日本における盛唐詩の模倣が荻生徂徠(1666~1728)とその門下のみならず、傾向が強かった。しかし、吉川幸次郎氏、杉下元明氏、石川忠久氏などによって、盛唐詩を規範とした作詩が、徂徠に先行し、新井白石、室鳩巢、祇園南海など、木下順庵門下の儒者たちの間で盛んに行われていたことが指摘された。また近年では、宮崎修多氏や高山大毅氏などの研究において、徂徠門下における盛唐詩の模倣についても、高度な婉曲表現として再評価する流れが顕著となっている。

以上をふまえ、本研究では、近世中期(18世紀)の日本で、なぜ盛唐詩の模倣がそれほど盛んに行われたのか、との問いに答えるべく、徂徠門下に先行して、盛唐詩を規範とした漢詩制作を行った木下順庵門下に焦点を当て、その中でも、新井白石や祇園南海などと比べて研究が進んでいない室鳩巢(1658~1734)の漢詩を分析対象とし、鳩巢にとって盛唐詩の模倣がいかなる目的と方法のもとに行われたかについて具体的な事例に基づいて考察することを目指した。

2. 研究の目的

本研究の目的は、江戸時代中期を代表する朱子学者、室鳩巢が制作した漢詩における盛唐詩受容の実態を実証的に明らかにすることにある。現存する鳩巢の漢詩は『鳩巢先生文集』前編・後編に収められたものだけで1,135首に上るが、これまで詳細に分析されてこなかった。本研究では、鳩巢の漢詩において、盛唐詩(特に、李白・杜甫・王維・孟浩然の詩)がどの程度、どのように参照されているかを網羅的に分析し、江戸後期~明治期日本における漢詩文の隆盛に大きく寄与したと考えられる江戸時代中期における盛唐詩の流行に、鳩巢がどのように加担・参画したかを明らかにすることを企図した。

本研究を実施することにより、近世中期(18世紀)の日本で盛唐詩の模倣が流行した歴史的背景について理解が深まるだけでなく、そもそも江戸時代から明治時代の日本で、いかなる理由によって漢詩文が重宝されたのか、という問いに対して、部分的な回答が可能となることが期待された。

3. 研究の方法

本研究では、以下3つの項目について考察することによって、室鳩巢の漢詩における盛唐詩の受容・模倣の実態について解明せんとした。

- (1) 盛唐詩に由来する詩語の利用
- (2) 漢詩制作の経緯・状況
- (3) 同時代日本における盛唐詩の模倣との比較

(1)では、別集『鳩巢先生文集』前編・後編、『鳩巢逸稿』及び『熙朝文苑』、『日本名家詩選』、『停雲集』、『木門十四家詩集』、『当世詩林』続編、『通昭録』などの総集に載る鳩巢の漢詩に見られる盛唐詩由来の語句の利用状況をできるだけ網羅的に調査・分析し、参照元を探ることを目指した。同時に、鳩巢が盛唐以外の時代の詩をどの程度、どの資料によって参照したかについても調査した。

室鳩巢の詩語を分析する際、特に注目したのは、盛唐によく作られた楽府題詩(辺塞詩、閨怨詩など)の模倣、また楽府題詩に由来すると考えられる詩語の使用である。あわせて、鳩巢が生涯を通して、しばしば作詩の機会とした中秋に焦点を当て、盛唐詩に由来する詩語や趣向がいかに利用されたかを検討した。

(2)では、(1)で詩語の分析を詳細に行った漢詩について、それらが制作された具体的な経緯や状況について、関連資料を横断的に調査し、特に盛唐詩受容の側面において、詩語の利用や詩の内容・形式と、詩が制作された場や状況とが、いかに連関するものであったのかについて考察した。

(3)では、同じく木下順庵門下でも、盛唐詩の受容の方向性が異なると考えられる祇園南海、及び荻生徂徠門下との比較を、詩語の分析と、作詩指南書などに載る詩論の検討の双方向から行った。

4. 研究成果

- (1) 平成28年度の研究成果

平成28年度は、加賀藩に仕官していた頃の室鳩巢の漢詩における盛唐詩受容を検討し、『唐詩訓解』が同時期の鳩巢の作詩に用いられた形跡を確認した。

特に宝永3年(1706)に制作された五言律詩の連作「古題拾五首」(東京都立中央図書館加賀文庫蔵写本『秋興八首雜題拾五首』及び刊本『鳩巢先生文集』前編卷五所収)を分析したところ、『唐詩訓解』からそのまま借用されたと考えられる詩語が全体の半数を超えることが判明した。

同連作所収の辺塞詩二首に焦点を当て、口頭発表を行い、論文を学術誌に発表した。杜甫の辺塞詩と杜甫・李白の楽府題詩をめぐる『唐詩訓解』注、並びに新井白石の批評を参照し、鳩巢の辺塞詩が、時事を詩に詠み込んだ「詩史」としての杜甫を意識して作られた

可能性を指摘した。詩の制作年を鑑みると、鳩巢が自著『赤穂義人録』の改稿を目論んでいた時期に当たり、辺境の地で忠節を尽くす漢代の兵士を詠んだ鳩巢の辺塞詩に、当世日本における時事（赤穂事件）に対する感興が託されている可能性が指摘できる、との読解を行った。

以上の考察を踏まえ、鳩巢の師であった木下順庵と青年・壮年期の鳩巢が、漢代の忠臣蘇武を詠んだ詠史詩の延長線上に盛唐の辺塞詩を受容したこと、またその理論的基盤として『唐詩訓解』注、及び『詩人玉屑』所収の北宋の詩論が摂取されていたことを明らかにし、彼らが辺塞詩の歴史性や時事性を否定した祇園南海や荻生徂徠門下とは異なる形で盛唐詩を受容していた、と結論づけた。

加えて、鳩巢と同門の祇園南海が、当世日本を題材に詠んだ竹枝詞「江南歌」を取り上げ口頭発表を行い、盛唐詩受容には「俗」の肯定とも密接に関連する側面、及び頭腦的に過ぎる模倣的作詩を批判する側面が存在し、大木康氏による明末古文辞説の研究をも参照しながら、清新性霊説の受容にも繋がる方向性を兼ね備えていたことを明らかにした。

あわせて、櫻田北岸の挿花論における袁宏道受容についても論文を執筆し、鳩巢の時代（18世紀初頭）には高尚と見做された盛唐詩の模倣が、近世中期の終盤（18世紀末）には、当時の茶の湯と同様、芸道化・大衆化し、金銭欲や名声欲にまみれた世俗的な営為として見做されていたことを当時の文献にもとづいて論証した。結果、18世紀前半と後半の盛唐詩の模倣は、区別して論じられるべきであることが明らかとなった。

（2）平成29年度の研究成果

平成29年度は、（ア）正徳3年（1713）中秋に室鳩巢と新井白石が江戸で交した漢詩と、（イ）室鳩巢が元禄～正徳期に制作した「和陶詩」の内、特に「擬古五首」を考察対象とし、室鳩巢の盛唐詩模倣における寓意の有無とその内容について検討した。

その結果、武家（幕府・諸藩）に儒臣として仕官した者の多かった木門では、六朝・盛唐詩を模倣した際、しばしば理想の君臣関係を表現したことが明らかになった。木下順庵や林鷺峰の詩文をも参照しながら、木門の儒者たちが六朝・盛唐詩を模倣した目的については、平安朝日本漢詩文を模倣し和習の多い漢詩文で理想の君臣関係を表現した林家に対抗し、和習がなく、同時代の海外（朝鮮・唐土・琉球）に劣らない正格の漢詩によって、徳川の世における理想の君臣関係を詠い上げる点にあった、と指摘した。

（ア）では、鳩巢と白石が、自身の詩作で李白の詩に由来する語や趣向を多用することで、主君（徳川家宣）を失い、林鳳岡から不当な批判を受けた白石を、讒言に遭い朝廷を去った李白に喩えたことを論証した。ここでの盛唐詩の模倣は、当世日本における現実の出来事に対する感興を、盛唐詩人の生き様や口ぶりに託して詠んだ寓意表現であり、必ずしも日野龍夫氏の服部南郭研究にいう「現実の遮断」とは同じでないことを指摘した。以上の内容について口頭発表を行い、更に詳細な調査を追加で行った上で、論文を執筆し学術誌で発表した。

（イ）では、鳩巢が蘇軾に倣って陶淵明の詩に次韻した「擬古五首」で、六朝・盛唐詩を模倣しつつ、主君に仕える臣下の心情を古詩の定型表現に託して詠む、との寓意表現が見られることを論証し、口頭発表を行い、論文を執筆した（掲載確定）。特に行役詩と閨怨詩の形式を取る詩に、理想化された忠臣の心情を詠う寓意が読み取れる。寓意のあり方は、『文選』六臣注の他、北宋の湯東澗による淵明詩の解釈、朱熹の『楚辭』解釈などに拠ると考えられる。

また、以上を踏まえ、平成28年度に検討を開始した鳩巢の辺塞詩は、赤穂事件をそのまま詠み込んだというよりも、時事に触発された可能性はあるにしても、まずは忠臣の理想像を示す寓意表現として解する方が適切であろうことが明らかになった。

更に、上記に加えて、室鳩巢が正徳元年（1711）の朝鮮通信使と応酬した漢詩を取り上げ、杜甫詩の模倣を検討し、口頭発表を行った。鳩巢が朝鮮通信使に贈った漢詩において、盛唐詩の模倣が意識的に行われたことを明らかにした。

（3）研究成果の意義と今後の課題

本研究における研究成果によって、近世初期～中期（17～18世紀）にかけての日本における盛唐詩模倣の勃興と流行、及びそれに対する反発がなされた経緯について、以下の仮説を立てることが可能となった。

（ア）近世初期（17世紀） 將軍に仕える儒者の家であった林家では、徳川の治世を、武力ではなく文物による徳治の行われた平安朝の再来と見做し、平安朝の日本漢詩文の模倣が行われた。將軍の寵愛を競い合い、林家とライバル関係にあった木下順庵門下の儒者たちは、林家の漢詩文を否定する形で、近世中期初頭（18世紀初頭）和習を完全に排除した盛唐詩の模倣を行い、徳川の治世を古代中国（聖人の代）の再来と見做し、また同時代の朝鮮や中国に劣らない日本の文化水準を寿ぐことで、公儀（將軍ないし藩主）の

寵愛を勝ち取るうとしたのではないか。

(イ) 荻生徂徠やその門下が盛唐詩を模倣したのこの根底には、自発的な古代中国への憧憬だけでなく、徂徠門下に先行して、將軍や藩主に多く仕官することができていた木下順庵門下の儒者たちへの対抗意識も混在していたのではないか。少なくとも、徂徠が木下順庵やその門下を意識していたこと、白石や鳩巢が徂徠を敵視していたことなどは、各々の著述によって確認することができる。また、正徳元年の朝鮮通信使と応酬した漢詩を木門と徂徠門がそれぞれ急いで出版したことも注目に値する。

(ウ) 享保期以降の民間での盛唐詩模倣の流行は、18世紀前半の大儒たち(室鳩巢、新井白石、荻生徂徠、服部南郭など)の高尚な営みが、商業出版の力によって芸道化・大衆化した、いわば廉価版として位置づけられるべきであり、近世日本における盛唐詩模倣の原型は、室鳩巢、新井白石など、將軍・藩主に近侍した正徳期前後の木下順庵門下の儒者たちの作詩に見出されるべきではないか。

(エ) 同じく盛唐詩を模倣した儒者たちの間でも、歴史や道徳を重んじた鳩巢・白石と、純粋な人情の把握を重んじた南海・徂徠の違いは、宋代の詩論を摂取したか、明代の詩論を摂取したかの違いによるのではないか。また盛唐詩の模倣への反発が、鳩巢・白石には見られないのに対し、南海や徂徠門下・末流には見られるのも、模倣的作詩への批判が、特に明末の古文辞説において顕著であったためでないだろうか。

以上の仮説については、今後、詳細な検証が俟たれるが、本研究では、盛唐詩の模倣が、初めから無用の中華趣味だったのではなく、本来は経世と実質的に結びついた文芸の形態であり、將軍の寵愛をめぐる儒者同士の競合とも関係し得た、という新たな視点が得られた。これまでの近世日本の漢文学史理解がある程度は更新できる可能性が見込まれる。

今後の課題として第一に挙げられるのは、室鳩巢や新井白石の師である木下順庵の漢詩における盛唐詩受容の調査である。荻生徂徠も記したように、近世日本における盛唐詩の本格的な模倣は順庵から始まったようであるが、その具体的な実態については、先行研究で全く検討されていない。本研究で得られた知見や、新たに生じた問いをもとに、同時代の林家との比較も行いつつ、今後、本研究で用いた方法も取り入れながら、順庵の漢詩を検討していく予定である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者には下線)

[雑誌論文](計3件)

山本嘉孝「室鳩巢の辺塞詩 — 盛唐詩の模倣と忠臣像の造形」『語文』第108輯(2017年6月、37-50頁) 査読有。

山本嘉孝「櫻田北岸の「瓶話」 — 袁宏道受容における挿花と禅」『雅俗』第16号(2017年7月、2-17頁) 査読有。

山本嘉孝「室鳩巢の中秋詩 — 盛唐詩の受容と儒臣像の形成」『日本漢文学研究』第13号(2018年3月、81-104頁) 査読有。

[学会発表](計6件)

山本嘉孝「室鳩巢の辺塞詩」(2017年1月7日)平成29年度大阪大学国語国文学会、大阪大学(大阪府)

山本嘉孝“Sailors’ Wives and Palace Laments: Depictions of Japanese Women in Gion Nankai’s *Kanshi*” (2017年3月18日) Meeting of the Early Modern Japan Network, Sheraton Centre Toronto Hotel (カナダ)

山本嘉孝「室鳩巢の中秋詩」(2017年5月19日)第62回国際東方学会、日本教育会館(東京都)

山本嘉孝“Poetry as a Non-Universal Medium: Muro Kyūsō’s Literary Exchange with the Chosŏn Mission” (2017年7月8日) Asian Studies Conference Japan (ASCJ) 2017 Conference, 立教大学(東京都)

山本嘉孝“Popularization of Literary Classics and Its Dissidents: The Case of Edo-Period *Kanshibun*”(2017年9月1日)5th International Conference of the European Association for Japanese Studies (EAJS), Universidade NOVA de Lisboa (ポルトガル)

山本嘉孝「室鳩巢の擬古詩」(2018年3月10日)北陸古典研究会2017年度下半期発表会、金沢大学(石川県)

6. 研究組織

研究代表者

山本嘉孝 (YAMAMOTO, Yoshitaka)

大阪大学大学院文学研究科・講師

研究者番号: 40783626